

平成24年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	特別活動と生徒指導の連携の視点から見た教育課程の再編に関する調査研究
------	------------------------------------

研究代表者

氏名 林 尚示	所属 総合教育科学系	職名 准教授
------------	---------------	-----------

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

特別活動と生徒指導の連携の視点から教育課程の再編について検討した本研究の成果は次の3つである。

第1番目に、東アジアの隣国である韓国の特別活動について調査が進んだことである。具体的には、ソウル市立ボンファ(Bonghwa)小学校の授業視察と校長 Kim, Dong Chon 氏へのインタビュー、ソウル市立ソヌ(Seonyoo)中学校の授業視察と校長の趙炳夾氏へのインタビューを実施した。その結果、韓国でも教育改革は進行中で、特別活動は、創意的体験活動として展開されていることがわかった。この創意的体験活動には、学級活動、クラブ活動、ボランティア活動、進路指導に相当する活動が組み込まれている。

第2番目に、教育課程全体の中で特別活動の特徴を明らかにできたことである。具体的には、特別活動は話し合い活動や児童会活動・生徒会活動など、活動そのものを教材としてとらえて実践されていることが浮上した。この成果は、日本教材学会の教材事典編集委員会で、各教科や他の領域の研究者との共同作業の中から見いだせた。特別活動の教材の特徴については、『教材事典』(日本教材学会、2013年刊行予定)に掲載する。

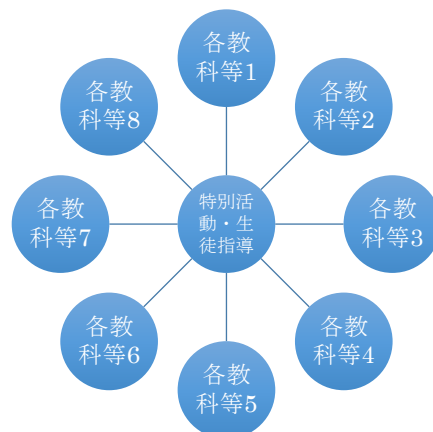
第3番目に、日本の特別活動と生徒指導について現状を振り返ることができたことである。特別活動については『教職シリーズ5 特別活動』(培風館、2012年)を編集し、生徒指導については『ワークシートで学ぶ生徒指導・進路指導の理論と方法』(春風社、2013年刊行予定)を共同執筆した。

本研究の3つの成果は次の関係にある。第3番目の成果により、現在の日本の特別活動と生徒指導について大学のテキストレベルの概要把握ができ、それを踏まえて、第2番目の成果である教育実践レベルの特別活動の特徴を指摘することができた。そして、概要把握と教育実践の特徴を踏まえて、第1番目の成果である他国の特別活動の改革動向を日本との比較を通して明らかにできた。

この3つの成果を活かして特別活動と生徒指導の連携の視点から見た教育課程の再編の方向性を検討した結果、児童生徒の人間関係を構築するための「つながり」の視点からも、生きる知識や技能を身につける「力」の視点からも、特別活動と生徒指導を活動レベルで統合し、教育課程の中心的な位置に据えることを提案したい。(右図)

その理由は、各教科等の学習が、特別活動の学業と進路の内容や、生徒指導の学業指導を充実させることなどで、効率的に展開できるからである。

また、特別活動・生徒指導の時間での教材については、今後、アクティビティを中心とした活動型教材を整備する研究へとつなげたい。



## 研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

**※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。**

**なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。**

- ・ 林尚示, 鈴木樹「特別活動における教材（2）」, 日本教材学会第24回研究大会研究発表論文集, 2012年。
- ・ 林尚示「『つながり』と『力』の測定・評価方法—特別活動の評価論」, 日本特別活動学会第21回大会研究発表要旨収録, 2012年。